

今は過渡期で、これまでの価値観ではまったく理解できない、新しいタイプの「不戦人間」が大量に発生しています。彼らはやってみただけで自分の思っていた仕事でなかったり、嫌なことがあると戦わずにすぐ逃げて、次の居心地のよさそうなところを探します。

不戦人間は地位や名譽、お金や物を所有することより、自分らしく生きたい、認められたい、愛されたいと強く思っています。彼らはバブル崩壊のころに育った子供たちで、いくら物を持つていても満たされない、いくら出世しても、会社に何かあれば捨てられる、リストラを見て育った世代です。努力とか根性、我慢という言葉が嫌い、「好きなことをすれば、頑張ろうと思わなくても頑張れる」と本気で信じています。

私は今まで人材派遣・人材紹介という仕事を通じて、何万人という人に働いてもらったり、悩みを聞いたりしてきました。その中で、会社に入っただけで辞める人には共通点があると気がつきました。彼らは自分のほしいものが手に入らないと思うとすぐ辞めるのです。できる人ほど、見限るのも早い。どこで

も働けるという自信があるからです。

転職することは、何も悪いことではありません。ただ、何も身につけないうちに転職を繰り返すことが問題なのです。そもそも自分らしさが最初からあると思うこと自体が間違いです。自分らしさとは、生きていく中で様々な人や出来事に出会いながら、「自分はこの人人間なんだ」と気づいていくことではないのに、自分らしい仕事などわかるはずがないのです。

「好きなことを

しないと成功できないし、お金持ちにもなれない」。こうした流行語に流される

若者は多いものです。「楽しいと感じる、したい仕事」へのこだわりは、自分らしさを探し求めさせます。そして

転職を繰り返させ、若者を迷いの迷路から抜け出せなくさせるのです。ですから、会社は彼らの迷いを断ち切り、迷路から引きずりだすことから、はじめなければなりません。

誰でも最初から自分が望む仕事をすることはできません。仕事は「その人間にその仕事をさせてもいい」と評価されないと、その仕事をするのはできないのです。だから、人からその仕事をさせてもいいと思われる実績を積んでいくことの大切さを、若者に教えずにはいけないのです。会社は、今している仕事で若者にとってどんな意味があるのか、意味づけをすることで迷いを断ち、他のことに目移りしないようにする必要があります。

しかし、人は自分の聞きたい話しか聞きません。若者は、自分らしく生きたい、感謝されたい、自己重要感を感じたい、好きな仕事をして成功したいと思っただけから、そのような言葉を使えば、若者に話を聞かせることができるのです。「会社のために一生懸命働いてくれ。そうしたら君の収入も増える」。こんなことをいっても逆効果

です。「所詮、あなた(経営者)が儲けただけでしょ」となります。「君のしている仕事を頑張れば、どこでも通用する人間になれるよ」。こんな若者の聞きたい言葉をいえば、「自分のことを大切に思ってくれている」と感じさせることができます。自分のことを大切に思ってくれる会社から、若者は簡単に離職しないのです。

会社は社員を働かせてはいけません。「働かされている」と思うから辞めるのです。それなら「働かず」ではなく、「働きたいと思うから働いている」と思わせればよいのです。そのためには、①仕事が自分のためになる②仕事を楽しむ③と感じさせることが重要です。

経営者は人を管理してはいけません。管理すべきは仕事です。仕事ができるように環境を与え、精神的なフォローをする。仕事での達成感を感じさせ、自己成長・自己実現をするために働いていると感じさせるのです。そんな会社なら、人が辞めることはありません。(談)

(詳しくは、蛭田敬子著「社員を働かせてはいけない」ベスト新書を参照)

視点

今どきの若者は… 自分らしさを求めて働く



蛭田 敬子

(株)アイカ 代表取締役
人事戦略コンサルタント